
フェニックスの野球予知

和音にほへと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェニックスの野球予知

【Nコード】

N0988P

【作者名】

和音にほへと

【あらすじ】

弱小プロ野球球団フェニックスは、今シーズンも交流戦終了直後でダントツの最下位であった。成績不振により、一軍監督は無期限休養となる。

そんな最悪の状況で監督代行となった火鳥千里は、突然、予知能力に目覚める。

予知能力を駆使して、火鳥率いるフェニックスは急激に勝率を上げていく。しかし、予知から生じた不自然な采配に、周囲からは不穏な空気がただよい始め。

架空の日本プロ野球リーグ、オー・リーグを舞台に繰り広げられる、先が読めない野球予知ストラテジー、ここに開幕！

第1章 フェニックスは死せず

プロ野球の試合では負けが許される。

シーズン終了時に勝率がリーグ内で一番高ければ優勝だ。1シーズン144試合制の場合、優勝ラインを勝率・650と高めに設定しても、50試合以上は負けられるわけである。

そういう意味でプロ野球は、一度負ければ全てが終わるトーナメント方式の高校野球と較べて気楽に思えるかもしれない。

たかが1試合負けたところで、終わらない。

ただ、状況が少し悪くなるだけ。

もちろんシーズン終盤の逼迫した状況だったり、CS、日本シリーズではそんな悠長なことは言っていられないだろう。

しかし今シーズンはまだ交流戦終了直後である。

全日程のうち4割を消化したに過ぎない。

よほど悪い成績を残していない限り、まだまだ挽回できるはずだ。

ここまでの戦いでは、各球団とも現有戦力 特に新戦力 の

見極めも必要だった。

いわば前哨戦。

対戦相手と同じリーグのチームに戻る、残り6割の試合こそが本番と言っても差し支えないだろう。

……繰り返すが、よほど悪い成績を残していない限りは、だ。

20勝42敗1分。勝率・323。

これはト・リーグに所属するプロ野球球団、フェニックスの現在の成績である。

首位ドルフィンズとゲーム差は19・0。

5位のフェアリーズにさえ8・5差と離されている。

優勝はおるか勝率を5割以上にするのでさえ、今後の試合を50

勝27敗で終えなければならぬ。50勝27敗とは、勝率に換算すると・649。1シーズンを通せば明らかに優勝ペースである。今まで負けに負けまくっているフェニックスにとって、とても現実的な数値とはいえない。

ましてや優勝など夢のまた夢。

彼らにとつて残り試合は、本番どころか消化試合に等しかった。

プロ野球はリーグ制だ。

負けても終わらない。

否、終われない。

絶望的な結果が見えていても、シーズン終了まで戦い続けなければならぬ。

気楽どころか生き地獄。

フェニックスは死せず、ただ負け続ける。

しかし、あくまでも死なないのは球団という母体であり、内部まで同じとは限らない。シーズン途中であろうと成績不振の責任から首を切られる者はいる。

その日、各社スポーツ新聞の一面には、フェニックスの尾嶋一軍監督退任の記事が躍っていた。シーズン終了までの契約が残っているから、正確には退任ではなく無期限休養なのだが、実際のところ大して変わらない。

立ち寄ったコンビニで記事を目にしたフェニックス二軍監督の火鳥千里は、マスク越しにため息をついた。

記事には今後の監督代行として自分の名前と写真も小さく載っている。

華麗な遊撃守備で観客を湧かせた現役時代ならともかく、今になつてこういうことで騒がれるのはごめんだつた。

幸い、マスクで顔が隠れているのが良かったのか、もともと二軍監督として知名度が低かつたためなのか、ここまでの買物物の道中

ですれ違つ人々から呼び止められることはなかったが。

「あ、どうも、監督」

「！」

コンビニ店内、雑誌コーナーの方から掛けられた声に火鳥はギクリとして振り返った。

「……なんだ、和也じゃないか」

声の主がフェニックス一軍控え外野手の白川和也であることがわかり、胸をなでおろす。

「なんなんですかそのマスク。風邪って様子じゃないですし……あゝ、ひよつとして変装ですか？」

立ち読みしていたらしい雑誌を棚に戻し、和也は人なつこい笑顔で尋ねた。

和也は高卒5年目でまだ若手選手というのもあるが、この笑顔とプロ野球選手にしては低い身長から、少年のような印象を抱かせる。

「まあな。朝からマスコミの対応やら監督業の引継手続きやらで大変だったのに、プライベートまで侵食されたらかなわん」

「おちおちマンガの立ち読みもできませんね」

「おまえな、騒ぎ以前に野球少年たちの模範となるひとりのプロ野球選手として、そういうことは控えておけ」

「いやあ、新監督もお堅いですね。まあ二軍監督時代から相変わらずといいいますか」

悪びれる様子もなく頭をかく和也に、

「おまえこそ、相変わらずみたいだな」

あきれたように火鳥は返す。

和也は昨年まで二軍のレギュラーであったため、火鳥は数也のことをよく知っていた。知っているどころか、期待の目をかけていた。和也は身体が小さくパワーこそないが、走塁センス、守備の技術には目を見張るものがある。打撃を磨きさえすれば、充分に一軍レギュラーで通用すると火鳥は考えていた。

今年に入って、二軍から一軍の控え野手になれたのは、大きな進

歩と言えるだろう。

しかし和也の一軍での役割はもっぱら守備固めであり、レギュラーとしての出場機会は皆無であった。

「新監督”も”、か」

火鳥は和也の言葉を反芻する。

「和也の目から見て、前監督 尾嶋さんはそういう印象だったのか？」

「え？ いやだなあ。べつに尾嶋監督を重ねての『も』じゃないですよ。むしろ私生活面では緩かったっすよ、あの人。まあ知っての通り野球に関しちやかなり頑固というか、尾嶋監督なりの哲学があったみたいで、そういう意味では『お堅い』かもしれませんが」

「ふむ、そうか」

火鳥はあごに手を当てて相づちをうつ。

シーズン前、尾嶋が目指したのは打ち勝つ野球であったようだ。

3番レフト デッドマシガンの異名を持つ元メジャーリーガー、新外国人のガーベラ。

4番サード 4年連続の30本塁打を記録し、一昨年は本塁打王にもなったフェニックス生え抜きの和製大砲、榎戸。

5番ファースト ロイヤルズから大型トレードで加入した往年の安打製造機、高田。

彼らクリーンナップを軸にした新生フェニックスの構想は、しかし見事に外れた。

3番を任されたガーベラが、とにかく打てない。シーズン開幕直後の3試合では合わせて2本塁打5打点の活躍を見せたものの、その後はさっぱりであった。終わってみれば現在成績は・185 4本 13打点の体たらくである。

5番高田も・253 5本 29打点と、悪くはないが期待されていたほどの結果を出せていない。

榎戸ひとりが・320 25本 44打点と絶好調なのだが、4番の前後で分断された打線がうまく繋がるわけがない。

ガーベラの成績を見れば彼の打順を入れ替えるなりレギュラーから落とすなりするのは当然の方策だが、尾嶋監督がそれを決断するのはひどく遅かった。

その理由を彼が口にするとはなかったが、つまるところ自分の構想に対して意固地になっていたのだらうと噂されている。

火鳥も同意見だ。

ガーベラは打撃以上に守備でもフェニックスの足を引っ張っていた。

もしも早々にガーベラに見切りをつけ、長打はなくてもフィールディングがうまい外野手を入れていけば、Bクラスは免れないまでもここまで負けがつづくことはなかったはずだ。

打ち勝つ野球から守り勝つ野球への転換。

尾嶋監督は己の信念を曲げてでもそうすべきだった。

すでに遅きに失した感はあるが、火鳥は次の試合から守りに主眼を置いたオーダーを組もうと考えている。

すでに心の中では選手・打順・守備位置すべて決めていた。

ガーベラが二軍落ちした今、火鳥が考えたオーダーとは、ただひとつの事柄を除いてはだれもが考えそうな順当なオーダーだった。

ただひとつ　今まで守備固め専門で、ろくに打席にも立っていない白川和也を1番センターでレギュラーに抜擢することを除いては。

「それじゃ監督、オレはそろそろ行きますんで」

そんな火鳥の思惑はつゆ知らず、軽そくに手をひらひらさせながら、和也はコンビニを後にする。

「……頼んだぞ」

ガラス越し、遠ざかっていく和也の背に、火鳥は祈るようにつぶやいた。

尾嶋のように、ひとりの選手に固執するつもりはない。もし和也が結果を出せなければ、早くて数試合でレギュラーから外す心づもりでいる。

しかし、二軍時代から目をかけてきた選手なのだ。
親心に似た愛着もある。

できれば活躍してほしいというのが本音であった。

一軍レギュラー最初の試合は緊張感もすさまじいだろうし、慣らす意味でも、ある程度ガマンして起用したほうがいいのかもしれないという考えが火鳥の頭によぎり、

(いかんいかんっ……私は尾嶋さんの二の轍は踏まんぞ)

迷いを振り切るように首を振った。

「痛っ」

直後、頭に刺すような痛みが走る。

火鳥は今朝方から頭痛に悩まされていた。風邪ではないようなので、疲労やストレスからきたものだろうと考えている。

コンビニに入ったのも、気つけに栄養ドリンクを買ったためであった。

火鳥は商品棚からCMでよく見るメジャーな栄養ドリンクを手に取り、レジに並んだ。

前の客が言った。

「1番、センター」

(はっ……?)

何事かと思い頭を上げる。店員が前の客の注文を受けてタバコ棚からセブンスターを取り出していた。注文番号は21番。

(なんだ、『21番、セツタ』を聞き間違えたのか)

関係ない日常のやりとりまで野球に聞こえるとは、いささか重傷かもしれない。

(飲んで、もうひと頑張りして、その後は早めにぐっすり寝るとしよう)

火鳥はそう決めて、栄養ドリンクを手でもてあそぶ。

ドリンクがビンではなくペットボトルだったなら、容器をバットに見立ててさらに野球のことを考えていたかもしれない。

栄養ドリンクのビンの形状もバットに見えないことはないが、い

かんせん小さすぎる。

手のひらの中でゆらゆら揺さぶられる栄養ドリンクから、

カキンッ！

バットに当たる、音がした。

(……………!?)

白球が飛ぶ。

ピッチャーを越え、セカンドの頭上も間一髪越えて、センター前にぼとりと落ちる。

電光板には「H」の文字が点灯する。

打ったのは白川和也。

レギュラーに抜擢された初の一軍試合、初打席で彼は見事に役割を果たしていた。

「あの、お客様……………」

「えっ……………あつ？」

店員の呼びかけで、火鳥はハッと我に返る。

(な、なんだ今のは)

突然頭の中に浮かんできた映像。

(まさか私は……………一瞬寝てたのか?)

レジに並んだ状態でまどろみ、次の試合で和也が活躍する願望にも似た夢を見たのだろう。

そう思い込んだ。

(滑稽だな……………)

火鳥は自嘲気味に笑いながら、買い物を済ませた。

彼はまだ気づいていない。

いつの間にやら頭痛が治っていることに。

そして、このビジョンが単なる白昼夢ではなく、れっきとした野球予知であることに。

第2章 おばけ大根の芽

1位	ドルフィンズ	3 8勝 2 2敗 1分	・ 6 3 3		
2位	マンティス	3 9勝 2 6敗 0分	・ 6 0 0	1	・ 5 差
3位	ロイヤルズ	3 3勝 2 9敗 1分	・ 5 3 2	6	・ 0 差
4位	ガントラーズ	3 1勝 3 1敗 1分	・ 5 0 0	8	・ 0 差
5位	フェアリーズ	2 8勝 3 3敗 3分	・ 4 5 9	1	0 5 差
6位	フェニックス	2 0勝 4 2敗 1分	・ 3 2 3	1	9 0 差

オー・リーグの順位表を見ると、今シーズン中のフェニックスの挽回がいかに絶望的であるかを、火鳥は改めて認めざるをえない。

現在首位に立つドルフィンズは、昨年ペナントは2位ながらも、CSを勝ち抜き、最終的には日本一に輝いたチームである。

ドルフィンズの強みは盤石な投手陣であり、今シーズンもそれは健在だ。好不調の波が大きくなりがちな打撃と違って、投手力は計算を立てやすい。この先のペナントレースも、ドルフィンズが大崩れする望みは薄いだろう。

そうなると、優勝ラインは6割強。下手をすれば6割5分を越える。上位陣がもつれて、ラインが5割5分を切るようならばまだ望みはゼロではないが……。

(たとえ優勝ラインが低かろうと、我々にとってはハードルが高すぎるがなあ)

火鳥は自チームの勝敗に目を落とす。

20勝42敗1分。

借金、22……！

優勝どころか、貯金してシーズンを終えることすら難しい。なにか目標を掲げるならば、優勝なんて口にせず、最下位脱出程度にとどめるべきだろう。

いや、今シーズンはもう勝敗を気にせず、来シーズンに繋がるような采配をするべきなのかもしれない。

(だが、それはさすがに、こんな状況でも応援してくださっているフェニックスファンの皆さんに申し訳が立つまい)

火鳥は自軍のベンチから、観客席を見上げた。

今日は交流戦明け。監督代行としての初試合。まだ試合開始1時間前で、ドルフィンズのホームゲームにも関わらず、アウェイであるフェニックスの応援席にはファンがそれなりに集まっている。

「ありがたいことだな」

「ええ、火鳥新監督に代わって、なにかが変わるかもしれないという期待の表れでもあるんでしょう」

打撃コーチ兼任で新しくヘッドコーチに就いた碓氷が、火鳥のつぶやきに応じた。

「うむ……その期待を裏切れれば、今度こそファンの愛想は尽きるかもしれない」

「そうならないように、今は一戦一戦、必死に食らいついていきましよう」

碓氷は少し間を置き、言いくそうに続けた。

「……ですから監督、今日のオーダー、考え直してください」

「なんのことだ？」

「実戦で若手を育てたい気持ちは分かります。しかし、彼をスタメンで1番に起用しては、得点能力が著しく下がることでしょう」

碓氷が言っているのは、白川和也のことだった。

「守備重視のオーダーを組んだことは否定せんよ。しかしあいつには長打はないが、それなりに出塁率を稼げるだろうと見込んでいる。足も速い。得点能力が下がるとは、思っておらん」

「……果たしてそうでしょうか」

火鳥の回答に、碓氷は懐疑的であった。

どうやら碓氷の和也に対する打撃評価は、かなり低いらしい。

碓氷の表情は真剣だ。

現役時代、そしてコーチ時代を通した経験則から、彼はそう判断したのだろう。

勝ちたい。

その気持ちは同じでも、否、だからこそ、噛み合わないのだ。

「確かめたのかね？」

火鳥は尋ねた。

「結果が出ないことを、和也を実際に使ってみて、そう言っているのか？」

「いや、それは……」

和也は今シーズン、たったの4度しか打席に立っていない。それも守備固めの途中出場、あまり重要でない場面ばかりだ。

たった4度の打席で、なにを見極められるというのだろうか。

「和也のやつ、オープン戦ではたしか3割ぐらい打ってたんだがな」

「オープン戦とペナントは違います。白川があんな基本を無視した打撃フォームを取る限り、公式戦では徹底的に内角を攻められて、手玉に取られるに決まっています」

「……………」

「私は何度も白川に打撃フォームを矯正するよう言ってきました。けれど彼は、口先だけハイハイ言って、私の言うことをちっとも聞こうとしない」

「……キミの言うことを聞かない。だから和也は打席に立たせられない、と？」

「違います。彼が他の選手と比べて、凡退する可能性が高いから立たせないのです」

「その可能性とは、データ上のものでなく、キミのただの予想だろ」

「ですが、私は」

「今年の和也なら公式戦でも3割打てる。それが二軍時代のあいつをずっと見てきた私、火鳥千里の予想だ」

「はあ……分かりました。そこまでおっしゃるのなら」

碓氷は渋々と進言を取り下げた。

「私も監督も、あくまでお互い予想です。野球に確実なんてありません。実際の試合結果を見て……どちらが正しかったかを判断しましょう」

「のぞむところだ」

火鳥はにやりと笑った。

が、内心は不安でいっぱいだった。

和也が3割打てると言ったのは、願望だけでなく本気でそう思っているからだが、予想はどこまでも予想。

確氷の言ったとおり、野球に確実はありえない。

それに、たとえ毎年3割をキープするような巧打者であっても、数試合ヒットが出ない日が続くことはよくある。

（まあ、結果があらかじめ分かっってしまうえば、起用に悩んだりせんわな）

心の中でため息をつきながら、火鳥は昨日の白昼夢を思い出した。夢で見たのは和也の第一打席だけではない。

今日の試合、丸々ひとつ分のビジョンが火鳥の頭の中には流れていた。しかも夢にしては珍しく、一日経った今でも鮮明に覚えている。

ビジョンの中で、和也の初回ヒットは、その後のバント失敗、3、4番の凡退もあって得点につなげることはできない。試合はフェニックスのフレミー、ドルフィンスの青柳が投げ合う投手戦となるが、最終的に3対1で破れて終わる。

（夢なんだからせめて勝ってくれば気分が良いのに……）

火鳥は自分のビジョンに対して、半ばあきれぎみにケチをつけた。

『1番 センター 白川』

アナウンスが今日のオーダーを告げ始める。

観客たちが意外な選手の1番抜擢にどよめいていた。

フェニックスのオーダー発表が終わり、つづけてドルフィンスの

オーダーが読み上げられる。

『9番 ピッチャー 青柳』

ドルフィンズのオーダーは、夢で見たものとまったく同じであった。

だが、火鳥はそれを特に不思議だとは思わなかった。

ドルフィンズの最近のスタメンは固定されているし、先発投手の青柳にしても、ローテーションの巡り合わせ上、順当なところである。

試合が始まり、和也が左打席に立った。

オーダー発表時以上のどよめきが、球場内に響く。

和也はふつうのバッターならありえないほど真っ直ぐに、直立姿勢で構えていた。バットは天を突くように高く掲げて、ゆらゆらと不規則に揺らしている。

白川和也の変則打法。

あえて例えるなら神主打法に似ているが、それにしても姿勢が直立すぎるし、バットの位置が高すぎる。

彼がこの打ち方に変えたのは今年からであり、公式戦では4度しかお披露目していない。

まだまだ初見の観客は多いのだろう。

青柳が第一投を放った。

和也の打撃フォームでは見るからに打ちづらそうな、キツめの内角球。

和也はバットを振る。

上から下に向かって、叩きつけるようにバットを振る！

ボールがバットに当たり、高く跳ねながらファウルゾーンへと転がっていった。

観客のざわめきがさらに大きくなる。

無理もない。プロの野手があかも不細工な、上から下に叩きつける大根切りを、堂々と使ったのだ。

内角球が打てないのなら、カットすれば良い。

そこまで簡単な話ではないのだが、つまるところ白川和也が編み出した変則打法の肝はそこにあった。

青柳は2球目を投じる。1球目よりさらに打者寄りの内角球だが、和也はそれを見逃し、ボール判定となる。

3球目はストライクゾーンからボールゾーンに逃げていく外角球。白川はつられずに見送った。

そして4球目は内角高めギリギリストライクを狙った、と思われる。失投であった。

ボールが真ん中に寄っており、和也は見逃さずバットに当てた。詰まったのか、打球に勢いはない。

しかし、ピッチャーの頭を越えて、セカンドの頭上もかろうじて越えた。センター前ヒットである。

観客や選手たちが沸く中、

「? !?? !?!?」

火鳥は手放しに喜べず、ただただその光景に困惑していた。まったく同じなのである。

夢に見た、否、頭に流れたあのビジョンと。

(いや、いやいや、ただの偶然……というか、デジャヴみたいなものだろ。錯覚錯覚)

火鳥は自分に強く言い聞かせた。

ともかく、今のが偶然ならば次は絶対にはないはずだ。

火鳥が見たビジョンでは、2番の羽田はバント失敗に終わる。打球を殺しすぎてキャッチャーに捕られ、セカンドアウト。ファーストに投げてゲッツーかと思しいしや、送球がやや高めに浮いてセーフとなる。

ただ打球の方角が一致すればそれっぽく見えた先ほどのビジョンと異なり、ここまで複雑な動きを伴えば錯覚を起こすこともないだろう。

そう火鳥が思った瞬間、羽田がボールを転がした。

打球を、キャッチャーが捕る……!!

まずセカンドでアウト。

さらに一塁へ投げられて 送球が、高く、逸れるっ！

一塁手はジャンプしてミットにボールを納めるも、羽田は先に一塁を踏んだ。

(なん、だっ、これは……!?)

火鳥は愕然とその成り行きを眺めていた。

(次の高田はライトへの凡フライで……)

そして高田は、ビジョンどおりに凡フライを打ち上げる。

(4番、榎戸……空振り三振)

榎戸も同じく、火鳥が思い描いたとおりの三振に終わった。

1回表の攻撃が終わる。

火鳥は自分の見たビジョンが、紛れもない未来予知であることを確信した。

第3章 理想を踏み越えてでも

1 回表から裏に切り替わるインターバルに、火鳥は「1・遊ゴ、2・一ゴ、3・補邪フ」と手帳の余白にメモを取った。

火鳥のビジョンが正確ならば、1 回裏ドルフィンスの攻撃はメモ通りの三者凡退に終わる。1 回表が終わった段階で、自分が未来を透視していることは認識できていたが、念のためその認識を脳内で完結させずに、アウトプットすることにしたのだ。

フェニックスの先発投手フレミーがマウンドでの投球練習を終える。ドルフィンスの先頭打者、御影が打席に入った。

御影は8 球粘った後、カウント2 - 3 から外角低めの速球を引っかけて、やはりショートゴロに終わった。

続けて2 番の永井は初球打ち。強いゴロが一塁に飛んだが、ファースト高田が難なくキャッチしてツーアウトとなる。

3 番李白歩は、2 - 1 と追い込まれてから難しい球に手を出してしまい、凡フライを打ち上げる。

寸分違わず、すべて火鳥が見たビジョン通りであった。そして火鳥は、この未来予知の特徴にひとつ気づいた。

凡退した各打者の打つ方角、打球の強さ、守備陣のフィールディング これらはフラッシュバックのようなカタチで視覚的に予知することが可能である。しかし、その打者が打席に入っているあいだの仕草、何球目を打つか、三振をする場合どのカウントで三振するか、などは予知できない。

つまり、結果は分かってもその過程までは分からないのだ。

まあ、たかがその程度の制限があったところで、いま火鳥の身に起こっていることの異常性が薄れるわけではないのだが。

(さて、私はいったいどうするべきだ……?)

火鳥は手帳の余白に書いて的中したドルフィンスの攻撃結果をグ

リグリとボールペンで塗りつぶして思索する。
いまはまだいい。

4回まではゼロゲーム。5回表にフェニックスが1点を先制するが、すぐにドルフィンズが追いつくので均衡は変わらない。

しかし、7回裏にドルフィンズが2点を奪取する。この失点が響き、3 - 1でフェニックスは敗れる。

このままの采配では敗れることが確定しているゲーム。

それを、未来予知という超常的な力を利用して動かしてしまってもいいのだろうか。

……あまりにもアンフェアだ。

しかし、べつに故意に相手打者の頭を狙うような球を投げさせたり、ビデオを利用して相手のサインを盗むわけではない。野球規則のどこに未来予知を禁じることが書いてあるだろうか。

アンフェアであっても、ルール違反でない。

チームの勝利を第一に考えるべきひとりの野球監督として、勝てる可能性を自ら絶つのも、また怠慢である。

しかしひとりの野球人、火鳥千里として、このような能力を使ってチームを勝利に導いたところで、それは情けないことだと思う。彼の哲学に反するのだ。

それでも、いや、だが、しかし……。火鳥が思い悩むなか、試合は未来ビジョンそのままに進行していく。

和也のバットから快音が響いた。

あわやホームランかというセンターフェンス直撃の当たりだった。

1塁ランナーの瑠璃原は一気にホームをおとしいれ、フェニックスが1点を先制する。

5回表、火鳥が予知したとおりの結果だったが、予知だけでは見通せない和也の対応力には驚かされた。

和也が打ったのは決して甘くはない内角球。それを狙いすました

かのように強振したのだ。

いや、実際に狙ったのだろう。あらかじめ内角にねらい球を絞っていないと、あそこまで見事なスイングはできないはずだ。

和也の打撃フォームでは、どうしても内角球に対してバットの出が悪くなる。当然、相手チームは内角を攻めるのが定石である。

しかし、内角球に対してあんな強い打球が飛ばせるのなら話は変わってくる。初めから狙ったときにしか出来ないスイングのようだから、当然、内角球で攻めたほうが打たれる確率は低い。しかし、ねらわれた場合の長打のリスクは極めて高い。

長打よりは単打がマシだ。そう考えると、自然と彼の得意な外角へ球が集まってしまう。

苦手コースを完全に克服するわけではなく、相手に苦手コースを避けさせることによって対応しようと和也は考えたのだろう。

少なくともこの三連戦、痛打を浴びたドルフィンズは和也に対して内角球が非常に投げにくくなった。

「間違っていたのは私のようです」

碓氷が観念したように言った。

「まだたつたの3打席だ」

早すぎる敗北宣言に火鳥は苦笑するが、

「いいえ火鳥監督、あれだけで充分です。あの内角打ちを偶然で済ますことはできません。気づけなかった私の落ち度です」

碓氷は首を振り、複雑そうな表情で二塁ベース上の和也を見つめる。

「悔しいですな。どうして気づけなかったのか……。彼が守備の人だという先入観があつて、打撃を期待していなかったからか。いや、先入観というならあの変則フォーム。あれでは絶対に打てないと、思いこんでしまった。特に私は基本に忠実な打撃こそがもつとも優れていると信じています。野球理論以上の、私なりの哲学というべきでしょうか。ああ、だからなおさら、白川に対して目が曇っていったんだと思います」

「先入観……思いこみ……そして哲学、か」

定石こそあるものの、野球指導に唯一絶対の正解はない。指導者はそれぞれ異なった理想を持ち、理想の実現を目指して指揮を執る。だが理想と現実に大きな差があるとき、指導者は誤ちをおかす。今までの碓氷がその最たる例である。

前監督の尾島も同じだろう。打ち勝つ野球を夢見れど、打ち勝てるだけの選手は揃わず。しかし打撃にこだわり続け、方針転換できなかつた。

（私は、尾島監督の二の轍を踏まないと決めた）

それは打ち勝つ野球にこだわらないという意味ではない。

状況に合わせた柔軟な采配を、自分の理想を踏み越えてでも勝ちに行く采配を、決意したはずなのだ。

なのに今、なにを考えている？ 野球予知に頼るのは情けないから、哲学に反するから、負けると分かっているも放っておくと？

「冗談ではない。」

火鳥はグラウンドを見やる。

2番の羽田がビジョン通りのセンターフライを打ち上げているところだった。

「選手交代だ」

火鳥は碓氷をはじめとするコーチ陣に言い放った。

「5回裏の守備から、羽田を代えてショートに森岡」

それは未来が見えていなければ考えもしないはずの采配。

火鳥はこのとき、初めて未来を改変した。

第4章 回避された失策

ショート羽田に代わって森岡。

火鳥が告げた選手交代は、コーチ陣の誰もが疑問に思うものだった。

たしかに今日の羽田は良いところがない。

第1打席はバント失敗。第2打席は平凡なセンターフライ。そして先ほどの第3打席も、ツーアウトランナー2塁という追加点の好機を棒に振った。

しかし、羽田は規定打席に達しているフェニックスのバッターの中で、.302と主砲榎戸に次いで高いアベレージを残している巧打者である。

守備も決して下手ではない。たしかにベテランの森岡の方が堅実であるかもしれないが、わざわざ代えるほどの差はないように思われる。それに羽田と森岡では、打撃力が違いすぎる。まだ5回裏でわずか1点のリードだというのに、守りの布陣で固めるのは不自然だ。

「……理由をお聞かせください、監督」

コーチ陣を代表するように、碓氷が尋ねた。

碓氷は試合開始前、和也をレギュラー起用するという火鳥の采配に異議を唱えた。そして和也の第3打席の結果を見届けた後、異議を撤回し己の過ちを認めている。

碓氷がまず反対するのではなく、理由を問いただしてきたのは、先ほどの経緯があったからだろう。

しかし今回の場合、火鳥にとっては、反射的に反対されるより徹底に理由を追及されるほうが厄介であった。

交代の理由がないわけではない。

しかし、バカ正直に答えるわけにはいかない。

5回裏、羽田のエラーをきっかけに同点に追いつかれることを予

知したから　などというふざけた理由を、信じてもらえるわけがないし、信じてもらうわけにはもつといかない。

予知能力に目覚めたなどという事実が世間に漏れ、万が一それが信じられてしまうようなことがあれば、もはや火鳥は真つ当な野球人生をおくることができないう。それどころか現役時代の活躍さえ、予知能力が関わっていたのではないかと邪推され、不当に辱められることではなからうか。少なくとも現役時代については無実なのに、ドーピング疑惑の選手のような扱いを受けるのだ。

予知能力のことは、なんとしてでも外に漏らすわけにはいかないのである。

「打撃の不調は、守備の不調に繋がる」

火鳥はあらかじめ考えておいたウソの理由を口にした。

「私の経験則でもあるが、打撃の失敗を取り返そうと力んでいると、身体の動きが鈍くなってくるものだ。下手にその日のゲームで挽回を狙うよりも、日を改めてリフレッシュさせたほうが良い。ましてや今日は投手戦で、1点を争うゲームとなりそうだ。肝心なところでミスが出れば大きく響く。ここは堅実にいこうじゃないか」

「しかし羽田は今シーズン、フルイニング出場を続けている選手です。最近の成績も悪いわけではありません。今日たった一日の不調でベンチに下げられては、本人も納得できませんでしょう」

「納得できないという問題ではなく、勝てるかどうかなのだよ、碓氷君。私はそのためにベストだと思いう采配を取っているだけだ」

試合前に勝つためのオーダーを提言した碓氷である。こう言われ、てしまえば、その采配が不可解であったとしても従わざるをえない。他のコーチ陣も、一応は火鳥の采配を認めることとした。

火鳥は審判に選手交代を告げた。

5回裏の守備が始まる。

予知のビジョンでは、先頭の6番打者は凡退する。次の7番打者もショートゴロに打ち取るのだが、羽田が悪送球しランナー2塁と^{いさひび}なってしまう。そして8番の漁火にクリーンヒットされて同点に追

いつかれる。

漁火に痛打された時、フレミーの投球コースは明らかに甘かった。打たれたのが何球目なのかは予知の性質上分からないが、初球打ちだったのではないかと火鳥は推測する。エラーに対する動揺が、不用意な第一投を生んだのだ。エラーさえなければ、この回は三者凡退で終わっていたかもしれない。

シヨートの森岡をちらりと見る。

火鳥のビジョンと食い違う存在。彼は果たして、現実にとどのような影響を与えるのだろうか。

先頭打者に対してフレミーが第一球を投じた。

ミットから小気味良い音が響きわたり、審判がストライクを宣言する。

5回になってもフレミーの球威が衰える様子はない。

今まで間近で投球を見る機会に恵まれなかった火鳥にとって、今日のフレミーは絶好調なのだろうと感じた。しかし投手コーチの伊藤によると、別段そうとも言い切れないらしい。もともとフレミーは変化球主体の投手なのだが、この試合では変化球のコントロールが甘く、代わりに調子が良かったストレートを主体に配球を組み直して、騙し騙しに凌いでいるのだそうだ。

ドルフィンズ打線がフレミーを打ちあぐねているのは、フレミーの投球傾向がいつもと違うことで狙い球が定まらなかったからだと伊藤は分析している。

「そろそろドルフィンズ打線も修正してくる頃合ですかねえ。勝利投手の権利が掛かる5回じゃ難しいでしょうが、危うい兆候が出てきたらあまりフレミーを引っ張らんでくださいな」

火鳥は黙ってうなずいた。

野手出身の火鳥にとって、投手の細かい部分までは目が届かない。伊藤の進言は素直に聞いておくべきなのだろう。

だが火鳥は、この回のフレミーが先頭打者を抑え、次の打者もエラーで出塁されるものの打ち取った当たりであることを予知してい

る。

伊藤の考えはおそらくそれなりに合理的で正当性のあるものなのだろうが、結果的に間違えている。それが火鳥には分かっている。カンツと鈍い打音が響いて、先頭打者はビジョンで見た通りの凡退に終わった。

さあ、問題はここだ　火鳥はネクストバッターズサークルから打席に向かう7番打者を注視する。

フレミーの第1球は、ボール。
続けて2球目もボールでノー・ツー。

3球目は見送りのストライクで、4球目はライト線に切れるファールボール。

カウント、ツー・エンド・ツー。

さらに5球目はカット気味のファールとなる。

何球目を打ってくるのか、予知できないのがもどかしい。

5回裏ワンアウトランナー無しという取り立てて注目することもない場面で気を詰めていたせい、碓氷がやや不審そうに火鳥を見ていた。

火鳥はそれに気づくこともなく、成り行きに注目する。

6球目　を投じる前に、フレミーはいったん足場を整える。間の悪さに、思わずため息がもれた。

改めて投じられた6球目　は5球目と同じようなファールボール。なにもこんなときに粘らなくてもいいではないか、と火鳥は身勝手に思う。

だが、ついに7球目、フェアグラウンドに打球が飛んだ。
方角はショート。

当たりさわりのないゴロを、森岡はしっかりとキャッチする。
そして送球。

球は逸れることなく、一塁手のグラブに収まった。
ツーアウトランナー無し。

本来ならワンアウトランナー二塁であったはずの場面。

未来は、改変された。

火鳥は自分のしでかしたことに戦慄を覚えつつも、采配が的中したことに安堵した。

次は8番の漁火だが、ツーアウトランナー無しではヒットを打つても試合は動かない。そもそも打たれたのはエラーの動揺のせいだろうから、なおさら問題ないはずだ。

が、火鳥の予想に反して、漁火は初球を打ってビジョンどおりに出塁した。いや、ビジョンで見たものより当たりが鈍かったように見える。コースもそれほど甘くない。

結果的には同じシングルヒットでも、やはり状況が変わってビジョンもズレているようだ。

次は9番ピッチャーの青柳。5回1失点の青柳はまだまだ替え時ではない。ドルフィンズベンチは代打をおくられずに、そのままバッターボックスに立った。

打者がピッチャーならば抑えるのはたやすい。ビジョンでもワンアウトランナー1塁で青柳は打席に立っていたが、あえなく空振り三振に終わっている。

火鳥が余裕をもって眺めていると、

カァン！

鋭い音が耳を突き抜け、打球はセンターとレフトのあいだを破るランナー漁火は三塁を回ろうとして、3塁コーチに止められた。和也が矢のような送球をキャッチャーに返していた。

「……っ！」

火鳥は唇をかむ。

ツーアウトランナー2塁3塁。

しかもバッターは1番に戻る。

一打同点どころか、逆転のピンチだ。

回避された失策が招いた、ありえないはずの状況だった。

火鳥は未来を予知し、改変することができる。

しかし改変された未来が良い方向に向かうかどうかは、結果を見

るまで分からないことを、このとき早くも思い知らされたのであつた。

第5章 変則中継ぎリレーの果てに

5回裏ツーアウトランナー2塁3塁。

未来を改変したことによって生じてしまったこのピンチは、じつに対応が難しい。

あとワンアウトでフレミーは勝利投手の権利を得る。ピンチを招いてしまったとはいえ、今のところ無失点なのだから続投させるのが定石だ。

だが投手コーチの伊藤曰く、今日のフレミーは決して好調というわけではなく、騙し騙しに抑えてきた。そろそろ打たれる危険が高い。

それになによりピンチの招き方が非常に悪いのだ。

打たれたり抑えたりしたうえで結局ツーアウトランナー2塁3塁になったのならまだ良いが、ツーアウトランナー無しから下位打線に　しかもピッチャーまでに　連打を浴びたのが痛すぎる。ここの失点は見ただ目の数値以上に重く響く。たとえ同点止まりであったとしても、試合の流れは一気にドルフィンズに傾くだろう。

ひよつとすると自分が予知した未来とは、細部を改変することはできても大きな流れは変わらないのではないだろうか。つまり、各打席の結果を多少は改変できても、敗戦という結果は変えられない。火鳥はSFについて詳しいほうではないが、タイムパラドクスを扱った映画でそういう問題が取り上げられていたような覚えがある。だがたった一度の逆境であきらめるわけにはいかない。

改変後の未来ビジョンは見えていない。ならば自身がベストだと考える采配をふるうだけである。

それが野球監督として当たり前のこと。

未来を予知し、先の結果を知ったうえで指揮を執るほうが異常なのである。

「ブルペンはどうだ？」

火鳥は意を決して伊藤に尋ねた。

「松平を準備させてましたが、まだ出来上がつとらんでしょねえ。まったくフレミーのやつ、どうせピンチを招くならツーアウトからポンポーンとやられるんじゃない、我々が準備できるように段階を踏めって話ですわ。監督、もう代えるおつもりで？」

「ああ、代える」

火鳥は言葉少なに、言い切った。

「了解しました。どれ、フレミーをなだめるついでにちよいと時間稼ぎもしますかねえ」

伊藤はしたたかに笑い、ブルペンの松平に「出番だ、急げ」と指示を出す。そして通訳を連れてマウンドに集まった選手たちのもとへとゆっくり歩きだしていった。

火鳥はマウンドに行かず、ベンチにどっしり腰を下ろして遠目に状況をながめる。フレミーは交代に納得がいていないようで激しく抗議するが、伊藤は心の底から弱ったような顔で（内心では舌を出してそうだが）必死に説得する。

やがてフレミーは腹立たしげにマウンドを降りた。ベンチに戻る際に「Shit」と口走ったように聞こえたが、見過ごすことにした。

火鳥は声に出さず、口元の動きだけでフレミーに言った。

「すまん。本当の未来なら、おまえは7回まで投げていた。3失点……自責点は2点だ。負けこそしたが、先発の役割は充分に果たしていたぞ」

フレミーに代わってマウンドに上がった松平は、今年になって頭角を現した大卒2年目の右腕である。防御率は3・32。若くて体力がありロングリリーフをこなせるため、数値以上に首脳陣から重宝がられていた。

今日の起用も、ピンチの火消し役だけでなく次の回を見越してのことであった。6回表のフェニックスの攻撃は3番高田からだから、ピッチャーまで打順が回ってくる可能性は低い。

ともあれ、次のインニングを考える前にまず今のピンチをなんとかしなければならぬ。

最近好調の1番御影とは、まともに勝負はしなかった。厳しいコースばかりを投げ、結局1ー3からフォアボールで空いた塁を埋めさせる。

ツーアウト満塁となって、迎えるバッターは2番永井。

ここ一番のターニングポイントとなる場面に、緊迫感が高まる。

その初球 永井は鋭くスイングした。

流し気味に打たれたボールは高く高く空へと上がり、内野の頭を越えるが……いかにせん高く打ち上がりすぎた。

ライトの木田が難なくキャッチし、たったの一球で、ピンチを脱出する。

火鳥はほっと息をついた。

ビジョンの未来は、変えられない未来じゃない。

改変結果の是非はともかく、良い方向に変えられる可能性を持っている。

守備から引き上げる選手たちにねぎらいの言葉をかけようかと思つた瞬間、火鳥は不意にグラウンドからミットにボールが収まる音を聞いた。

交代のインターバルで、今はマウンドにだれも上がっていないのに……。

次の瞬間、脳裏に高田が空振りして審判がアウトを宣告する映像がよぎつた。

「……っ！」

火鳥はハツとなつて頭を抑える。

3番高田は空振り三振 4番榎戸は四球で出塁 5番兵藤は

レフトフライ 6番燕はピッチャーゴロ !

6回表のフェニックスが無得点で終わる未来ビジョンである。記憶が薄れてやや曖昧ではあるが、そこまでは以前に見た未来ビジョンと同じものであったと火鳥は思う。

決定的に違ったのは、続けて頭に流れ込んできた6回裏のドルフィンズの攻撃ビジョンであった。

投げているピッチャーがフレミーではなく松平になっていた。

それは未来改変を反映したビジョン。

再び見えるまでに時間差はあったものの、火鳥の未来予知は一度きりのものではなかったのだ。

2度見えたということはおそらく3度目もある。今日に限らず、明日の試合も、明後日の試合も、この先ずっと……。

火鳥はごくりと息を呑み込んだ。

1日限りの能力でないことは半ば想像していた。しかし未来改変直後は改変後の未来が見えなかったから、安堵していたのも事実であった。

ひとまず、少なくとも今日の試合は未来予知を最大限に利用して勝利を目指す。それはもう決めた。

しかし、明日以降はどうする……？

敗北が視えても黙認するのか、それとも今日と同じように未来改変を行っていくのか。

火鳥は首をぶんぶん横に振り、

（今は、とにかく今は、試合に集中しよう。明日以降のことは、とにかく、試合が終わってから考えるんだ……！）

動じる胸中、冷静になれていないことを自覚し、結論を先延ばしにすることを決めた。

また、新たに見えたビジョンの展開からしても、火鳥はこの試合に集中せざるを得なかった。

6回裏、松平は打たれる。

ノーアウトから連打を浴びて、結局2失点。

さらに8回裏にもセットアップの朽丘くちおかが3失点し、1 - 5でフ

エニックスは敗れる。

負けは同じ負けでも、未来改変前の1-3より悪い結果だ。フレミーを早めに降ろしてしまっただがゆえのひずみだろう。

だが悔いても仕方ない。どのみち改変前のフレミーでも、6回までで1失点、7回までで3失点であった。

一方この後フェニックスにチャンスらしいチャンスは巡ってこない。代打による未来改変では、得点できる望みは薄いだろう。そうになると、中継ぎ陣を駆使して無失点で切り抜けるほうが得策だった。「松平を代える」

火鳥は伊藤を見ずに、グラウンドに視線を向けたまま言った。

6回裏をにらんで松平を起用したはずだった。ピンチをうまくしのいだ彼を代えるのは、明らかに常識はずれである。

理由を問われれば何と答えよう。

5回裏の投球を見て調子が悪いように見えた、次回は打たれそうな予感がする……そんなところだろうか。いや、たった一球投げただけなのに、その回答は苦しいだろう。

投手の状態に関しては、打者出身の火鳥よりも伊藤の方が熟知している。下手なことを言っていると不審がられるかもしれない。

「となると6回は園花そのはなですかねえ。3番、4番、ひとつ飛ばして6番と左打者が続きますし」

そんな火鳥の心配をよそに、伊藤は特に疑問を口にする事もなく、交代候補の投手を挙げた。

「……よし、園花で行こう」

予知通りに6回のフェニックスの攻撃は無得点で終わり、裏の守りに入る。

やはり改変後のビジョンを見るのには時間がかかるらしく、園花に代えた結果の善し悪しは今の段階では分からない。

しかし園花は、松平なら連打を浴びるはずだった3番李白歩、4

番ブルームを見事に斬って落とし、さらに5番打者も打ち取って、三者凡退に終わらせた。

ちょうどそのタイミングで、火鳥は新たなビジョンを視ることとなった。

相変わらずフェニックスの攻撃はゼロ行進。

守りの方は、7回裏に新山にいやまがツーアウトランナー2塁のピンチを招くもゼロに抑えるが、8回裏に朽丘が2点を失う。

「うーむ……」

と、悩ましげに火鳥はうなる。

朽丘は前回のビジョンでも3失点していた。

登板状況に関係なく、今日の朽丘は調子が悪いようだ。

抑えの寺宮てらみやがすでに今シーズン3敗で、防御率4.33といまいちピリツとしないのと対照的に、朽丘は防御率1.67とフェニックス中継ぎ陣の中で最も良い成績を収めている。

しかし好調がいつまでも維持できるとは限らない。ちょうど交流戦から期間が空いてしまったこともある。ここに来てついに、調子の波が下方に沈んでしまったのだらう。

この試合、朽丘は使えない。

そうなると問題は、8回を誰に投げさせるかだ。新山、寺宮以外に、接戦で使えるほど信頼できる控え投手はもういない。交代直後の未来は分からないのだから、彼ら以外を使うのはギャンブルである。

火鳥は伊藤に確認した。

「園花だが……続投いけるか？」

朽丘が使えない現状、園花、新山、寺宮の三人のうち誰かを引き延ばして使うしかない。彼らのうち、新山は今年42歳の大ベテラである。火鳥の現役時代晩年にはフレッシュ新山などと呼ばれていたが、それも今は昔の話。チーム最年長の彼にイニングまたぎをさせるのは酷だらう。

抑えの寺宮にしても、セットアップパー朽丘の存在が大きく、尾島

監督時代に2イニング投げさせることは無いに等しかった。

「できれば代えておきたいですが、続投できませんこともないでしょう。まあ監督の気持ちは分かりますよ。追いつかれて延長戦にでもなるものなら、投げさせるピッチャーがいなくなりますからねえ」

じつは延長戦以前の問題なのだが、伊藤がそう解釈してくれるのはありがたかった。

ワンアウト後、ダミーの代打として光坂をネクストバッターズサークルに向かわせる。

8番瑠璃原も凡退し、予知通りのツーアウトランナーなし。この後のビジョンでは光坂が出て凡退となっていたが、園花をそのまま打席に送って未来を改変する。

しかし投手の園花に青柳の球を打てるわけがなく、あえなく三振。「うっ……!?!」

不意に火鳥は改変後の未来ビジョンが頭に流れ込んでくるのを感じた。

早い。これまで2度あった改変後の透視は、ある程度時間が経つてからのことだったのに。

いったいこの時間差はなにが影響しているのだろうかと考え、すぐに気づく。

未来ビジョン更新のタイミングは、互いのチームの攻守が交代する瞬間なのだ。

たとえば誰かに代打か代走をおくった場合、次の未来ビジョンが見えるのは、その回の攻撃が終わった直後であり、逆に投手を代えたり守備を変更したりした場合、その回をスリーアウト・チェンジで切り抜けた直後に未来が見える。

交代直後の結果が分からないから若干不安は残るものの、それでもこの予知能力は凄まじい。駆使すれば、多くの負け試合をひっくり返すことができるはずだ。

が、火鳥は更新された未来ビジョンを確認していくうちに顔をしかめていく。

7回裏の守りまでは順調だった。続投の園花がツーアウト、一塁、二塁のピンチを迎えるものの、青柳に代わる代打のバッターを抑え込み、無失点で切り抜ける。

しかし8回裏、新山が1点を失ってしまう。9回、10回と寺宮はゼロで切り抜けるが、11回に朽丘が先頭打者にサヨナラホームランを打たれてゲームセット。

(ええいつ……今度は新山と……やっぱりお前もか、朽丘！)

新山は他のビジョンではランナーを出しつつも無失点で切り抜けているから、今回のビジョンの失点は打順の巡り合わせによるものだろう。園花がふたりのランナーを背負うことによつて、8回裏のドルフィンスの攻撃は1番からの好打順となってしまうのだ。

8回に限つて新山も使えない。いや、1番打者からの好打順を抑えられる適任者といえば、もはや一人しか考えられない。

「8回からは寺宮を起用する」

「なつ!? ちょっと、監督、それは」

横から悲鳴を上げたのは、ヘッドコーチの碓氷であった。火鳥と同じく投手の起用に関しては専門外だが、それでも火鳥の相次ぐ定石崩しに対して、何か言わずにはいられなかったのだろう。

レギュラー羽田には不可解な途中交代。

無失点先発投手フレミーの勝利投手目前での降板。

ロングリリーバー松平のワンポイント起用。

左キラー園花の2イニング起用。

そして、セットアップパー朽丘を残した状態での、守護神寺宮8回投入。

どれもこれも常識破りの定石外れ。

しかし火鳥も、この試合に勝つために、もう後には引けない。

「了解しましたぜえ、監督。すぐに寺宮テリウに伝えときます」

啞然とする碓氷を尻目に、伊藤はくつくつと笑いながら、異論を挟むことなく席を立ち上がる。

いつたい伊藤が何を考えているのやら、火鳥は不気味に思い始め

た。

第6章 試合の終わり伝説の始まり

フェニックスとドルフィンズの8回表までの攻防は予知通りに進み、8回裏となる。前任の尾嶋監督なら確実にセットアッパーの朽丘を送り込んだであろう場面に、火鳥は抑えの寺宮を起用した。

この試合、定石崩しを繰り返してきた火鳥采配だが、以前のものと同回とでは意味合いが大きく異なる。

まだ試合がどう動くか分からない中盤ならば、奇抜な采配もまだ許容できた。だが終盤の詰めでの采配ミスは、ひとつの敗戦以上に大きなものを失う。リードしているならば、徹底してセオリー通りに、盤石にいくべきものだ。

フェニックスは弱小チームながらも、8回朽丘、9回寺宮の投手リレーはなかなか堅固で、ここ数年、勝利の方程式となっていた。

今シーズンの寺宮はすでに3敗しており、例年ほど方程式は堅固とは言えない。しかし、だからといって一度固めた方程式を安易に崩すのは危険である。勝利の方程式を持たないチームは、接戦で勝利をイメージできなくなる。それはつまり、ここ一番の勝負どころで弱くなるということだ。

それが想像できたから、確氷は懲りもせず火鳥を止めようとした。しかし火鳥はお構いなしに聖域に手をつけた。

その采配が長期的にどう影響するかは分からない。その日の試合経過を予知できる火鳥でさえ、その次の試合からは未知の領域である。

だが少なくとも、今日のゲームに限って言うならその采配は大成功と言えた。

寺宮はランナーを一人出すも、きつちりと8回裏を0点に抑えることができたのだ。さらに、新たに更新された未来ビジョンは、ここに到ってようやく、フェニックスの勝利で終えるものとなっている。

た。

「……？」

ただしその勝利は、過程に大きな疑問符が残るものであった。

9回裏、登板して抑えるのが新山なのである。

火鳥の構想では、寺宮を2イニング連投させてこのゲームを逃げるつもりでいた。なぜ新山が投げているのだろうか。

ややこしい話だが、未来ビジョンの自分は寺宮が9回裏に打たれるのを予知しており、そのため新山に代えて勝利したビジョンを、今の自分が見ているのかしれない。

……いや、そんなことができるのならはじめに見たビジョンで勝利していないとおかしいだろう、と火鳥は思い直す。

未来ビジョンの中での火鳥千里は、先の未来が見えないものと仮定したうえで最も自分らしい采配を揮っていた。

火鳥が見ることのできる未来とは、その先の結果が分からない状態で進行した場合の未来なのだ。

現在9回表、ワンアウトランナーなし。この攻撃は未来ビジョンによると三者凡退で終わり、ピッチャーまで打順はまわらない。

ブルペンで投球練習をしているのは寺宮と朽丘のふたりだけであって、新山はベンチに座っている。

寺宮には9回も続投させることを告げている。

複数の未来ビジョンで投壊を起こしている朽丘を今日投げさせるつもりは毛頭ない。だが寺宮が崩れたときの対策として、見せかけだけでも、新山より朽丘を準備させたほうが自然だった。

新山もブルペン入りさせたほうが良いだろうか。

いや、もしもこの未来ビジョンを見ていなければ、火鳥はそんな指示を考えもしなかっただろう。

直接選手を交代するわけではないが、新山を準備させれば彼のピッチングに微妙な違いが生じ、未来改変に繋がるはずだ。

すでに未来で勝利は約束されている。

下手に動かないほうが良い。

火鳥はそう心に決めて、すでに見知っている試合展開へと意識を集中させた。

ツーアウトランナー無し、7番木田がツーナツシングと追い込まれている。もう攻撃が終わろうかというこのときになって、火鳥はようやく不可解な寺宮交代の原因を知ることとなった。

ブルペンまわりがざわめいている。

見ると、寺宮が気遣うように自分の肩を押さえ、ブルペンキャッチャーが寺宮のもとに歩み寄っていた。

伊藤もそれに気づき、不敵な表情が引き締まる。状況を確認し、すぐに火鳥に報告する。

「肩に違和感だそうです」

「なんだと……？」

火鳥は目を見開き立ち上がった。

「寺宮本人は大丈夫だと言い張ってましたが、ここは大事を取って交代させるべきでしょうなあ」

苦々しく言いながら、伊藤は朽丘のほうを見る。

寺宮が投げられないなら、当然その代わりは朽丘だ。

防御率1点台のセットアッパー。

本来ならば最も信頼できるピッチャーなのだが。

「ダメだ！ 朽丘は……ダメなんだ」

思わず口走ってしまい、後悔する。

これでは理屈もなにもあったものじゃない。

今まで火鳥の奇妙な采配に異議を唱えずにいた伊藤だったが、さすがに不審の色がにじみ出た。

「では、どうしろと？」

伊藤の詰問に、火鳥は声を詰まらせる。

「先に言っておきますがねえ、寺宮は続投させませんよ」

続投できないのではなく、させない。

そういえば伊藤は現役時代、無茶な連投で肘を壊して引退時期を早めたのだったかと火鳥は思い出す。

これまで唯々諾々と従ってきた伊藤だけに、碓氷と違つて反論を押し退けるのは難しい。

いや、そもそもシーズン中のたった1勝のために1投手の選手生命を危険にさらすのは、火鳥も望まぬことだった。

寺宮は投げさせられない。

朽丘を投げさせるべきでないことは火鳥だけが知っている。

「……投げさせるのは、新山だ」

火鳥は早口に言つて、伊藤から目を逸らした。

なるほど。たとえどれだけ不自然であつたとしても、勝利を得たのなら未来ビジョンどおりの采配を執らざるを得ないわけである。

火鳥は苦虫をかみつぶしたように表情をゆがめた。

勝利の方程式を崩すにしても、結局1点差の8、9回を朽丘か寺宮に任せるならまだ分かる。だが、その不可侵の領域に新山が入ってきたのだから、周囲は困惑するばかりであつた。

観客席からは、朽丘が知らぬうちに負傷したのではないかという的外れな憶測が飛び交う。

ドルフィンズベンチも8回の寺宮起用時に朽丘の負傷は疑つたが、ブルペンでの投球練習を見るにその可能性は低いと考え直していた。

だから9回の新山起用は、まったくもって不可解としか言えない。「漁火、君はどう見る？」

ドルフィンズ監督の入鹿がキャッチャー漁火に尋ねた。

「うーん……納得はできませんが、あえて理由を探るなら陽動の一種ではないかと。リードでも、打者の意表を突いて定石外れの球を混ぜるのは、まあ一種の定石ですし」

「それにしても混ぜすぎなんだよな、あの新監督さんは。定石を外してくれば、それだけ付け入るスキが広がるってことだけ……」

「今のところ、のらりくらりと抑えられてしまつてますね。まあ一種の偶然ではないかと」

言葉を継いで、漁火はそう結論づけた。

「……………本当にそうだといんだけどね」
しかし入鹿は首をひねる。

「どうも不気味なんだよ。杞憂だと思うし、外れていてほしいんだけど……………僕は新山が出てきた瞬間、このゲームは勝てないと感じた。勝利の芽を根こそぎ刈り取られてしまった気がするんだ」

「いやいやいや、ちょっとやめてください監督。試合中ですから」
聞いて驚き、漁火は声を潜めて入鹿をいさめた。まだ勝敗が決していないゲームで、勝てないなんて弱気な言葉、たとえ冗談でも指揮官が口にするべきではない。

「うん、口外したら罰金な」

入鹿は冗談めかして言ったが、目元は笑っていないかった。
漁火が息を呑む。

入鹿監督は、決して資金が潤沢ではないドルフィンズを3年で常勝軍団に変えた名監督だ。口にするべきこととするべきでないことの分別ぐらい当然ある。思いつきで物は言わない。

この発言に明確な意図があるのだ。

自分にだけ、タブーを犯しても伝えたい何か……………。

漁火は頭の中でその意味を咀嚼しながら、視線だけグラウンドの方に戻した。

9回裏は火鳥監督の予知通り、そして入鹿監督の予感通りに零封で終わり、フェニックスが試合に勝利した。

ヒーローインタビューには初スタメンで決勝打を含む2安打を放った白川和也が選ばれる。敵地ゆえに祝福はささやかなものだったが、和也は満面の笑みを浮かべた。

それにつられて火鳥も穏やかにほえんだが、またすぐに表情を堅く戻し、頭に浮かぶ未来ビジョンをリピートする。

そのビジョンは今日行われた試合のビジョンではない。

試合が終わった直後に、明日のビジョンに更新されていたのだ。

「やはり続くか……」

火鳥はだれにともなくつぶやいて、明日以降の身の振り方を考え始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0988p/>

フェニックスの野球予知

2011年1月21日23時10分発行